

公明 ^{'88}NO.320 September 9

THE KOMEI

〈特集〉日本の原発

—30年目とこれから—

④ 対 安全性・コスト・廃棄物

⑤ 論 をめぐって 森 一久 VS 槌田 敦

「脱原発」へ向かう世界 高榎 堯

代替エネルギー最前線 松岡信夫

〈検証〉放射能の遺伝的障害 野村大成

第3 消費税は不要 八田達夫

6 消費税は自民の党利党略 杉岡碩夫

〈新連載〉かしこい消費者講座 卷 正平

⑦ 政教分離・政治と宗教の関係

⑧ 談 矢野絢也／市川雄一／和田教美

公明党政治理論誌

日本の原発30年

対



森 一久氏 (原子力産業
会議専務理事)

廃棄物をめぐって

きたらと考えています。初めにアメリカのスリーマイル、ソ連のチェルノブイリ事故の教訓から議論をお願いしたいと思います。

榎田敦氏 原発の事故の問題は、恐れていたとおりになりました。

このチェルノブイリの事故まで、ソ連の人たちは、スリーマイルの原発とソ連の原発は炉型が違うからソ連の原発は安全だという説明をなさっていたようです。ところが、チェルノブイリで事故がある

と、日本の原子力推進の方々

は、チェルノブイリと日本の原発は型が違うと言われるわけです。型が違うから、確かに同じ形の事故はあり得ない。しかし、そういうような言い方をしていいのだろうか。原子炉には放射能がいつ

論

目とこれから

安全性・コスト



榎田 敦氏 (理化学研究所
職員)

チェルノブイリの原発事故の影響は、ソ連、ヨーロッパを初め、食品汚染を通じて日本でも問題にされるようになってきました。ところが、日本国内の状況はというと、かつて見られなかった原発の声の高まりがあり、片や原発を推進する関係機関や電力会社は巨額な資金を投入しての安全P.Rの強化に努めるといった、かみ合わない状況が続いているように見られます。

そこで、「日本の原発30年目とこれから」と題して、特集を組みました。立場の違うお二人ですが、原発についてのさまざまな疑問、あるいは問題点を率直に話し合っていたら、二十一世紀あるいは未来社会に向けての誤りなきエネルギー政策の糧にでき

つたときに、水を入れようと思っても入りにくいか、保護処置を止めてしまったとかいろいろなことがありましたね。あの型の炉は経済性を追求する、あるいは潜水艦型の真似をして、ある意味では高速自動車みたいな設計であったというように、ずいぶん違いがあるので、あまり簡単に同じだなんて言っていたらだいたくないわけです。

もう一つは、スリーマイルの場合ははっきり言って札つきの発電所ですね。ご承知のように、原子炉事故が起きてしまった後、ECCS (Emergency corecooling system 非常用炉心冷却装置) が自動的に働き、せっかく炉心を冷やしていたわけです。ところが、それをとめてしまったわけです。それはなぜかという点、後で明らかになったのですが、あの炉は前年に十六回ECCSが誤作動している。つまり、ECCSというのはしょっちゅう間違っただけで、また間違っただけで動いた(笑)。とめてやれと。こういう悪い意味でのなれがあり、しかも三つの小さな電力会社が共同で持ち合っているから、水を出し過ぎて水びたしになると後でうるさいから、とめておけとか、いろいろなことが重なって起きたことです。それから、チェルノブイリは幸いだったとおっしゃっているけれども、全く逆でして、幸いではなくて、むしろ品質の悪いグラファイト等(黒鉛)であるせいもあったのだと思います。大体グラファイトはそう簡単に燃えないもので、あの後、日本でも燃焼試験をすぐやってみたらたのすけれども、

ましたが、言われるとおりで、私もいろいろな記録を読めばそう思います。本当かどうか知りませんが、故障の札をぶら下げておいたら、その下の警報ランプが見えなかったとか、そういう意味ではむしろちゃんや原子炉だと確かに言われており、私もそう思うのです。ところが、先ほどチェルノブイリもしくりとおっしゃったけれども、そこところは私の聞いているのとちよつと違つて、チェルノブイリの四号炉に限つて言うならば、これは優秀な原子炉だったというニュースもある。そのために事故を起こしてしまつた。つまり、この原発はどんなことをしても大丈夫な原発だという印象が、運転員の中にあつて、その結果、こんなことになってしまつたのだと。

そのことについては、ソ連の科学者として、日本の科学者にこのことをよく知ってほしいというような話が、あの当時ありましたね。だれが何と言つたか、もう忘れまじつたけれども。

森 ほんのちよつとの間だけでも、ありました。

榎田 それはウソだったのかどうか知りません。しかし、いづれにしても、そういういろいろな話もあつて、本当に優秀な原子炉が仮にあつたとすると、やっぱり安全を過信してしまうだろうと思います。したがつて、原子炉というのは、良過ぎて、悪過ぎて怖いのだという印象を私は持つたわけです。

なかなか火がつかないし、火がついてもすぐ消える。中にあつたものを十日間にわたつてあぶり出したわけです。あんなことはそれこそあり得ないことです。

あの型は不安定な性質の原子炉で、しかもあらゆる安全装置を全部外して、自動車で言えばブレーキも、救命具も全部外して下り坂でアクセルを踏んだようなものです。そういうことであつても、やっぱり自動車をつくる人が教訓にしようと思つたことはよいことでしょう。しかし、教訓にしていることを、逆につかまえて、同じことが起きるのだからと言われたら、大変困るのです。

榎田 スリーマイル島事故で、炉心が崩壊し、溶融することになった直接の原因は、急に冷たい水を送り込んだからです。炉心の上部が空だきになっていることを知らないで水を急に入れたのです。しかし、炉心が空だきだから炉心溶融になったことを運転員が知つたとしたら、かえつて大変な事態になつたに違いありません。電力会社の幹部たちが「炉心溶融だということを知つていたら、運転員たちは逃げ出したろう」と言つています。逃げ出したら、もつとひどいことになるわけですね。「知らぬが仏」と言いますけれども、先ほど知らなかつたことが悪いというように言つてもいいが、知らなかつたことがかえつて幸運なこともある。スリーマイルの場合はそんなことではなかつたかと思つます。そこで、先ほどスリーマイルが札つき原発だとおっしゃい

森 先ほどおっしゃつていた、中の状況がわかりにくいということはあると思つます。だからといって、原子炉というのは何もわからないので、何が起きるかわからんというふうには誤解されるような言い方は、やめていただきたい。最近では種々の炉内の診断装置もついているのです。

原子炉過信ではないか 榎田

榎田 いづれにしろ、今、良い原発と悪い原発の話をしていくわけですが、良い原発ということとは、どうしても安心があるわけですね。悪い原発だと、悪い原発であつたために間違つてしまつたこともあるけれども、注意して運転しますから。ところが、原発がなかなか事故がないということになりますと、やっぱりみんなの緊張が解けますから、したがつて、注意しなければいけないというソ連の学者の注意事項というのは、気にしなければいけないところなのです。

森 言われなくてもね、注意しているために……。

榎田 はたから見えています、最近の日本のいろいろな事象は、原子炉を過信しているのではないかと感ずることが多いわけですね。例えば、美浜原発も含めて関西電力系の蒸気発生器の中に足場を組み込んだ時の、ボルトを大丈夫だろうとつけっぱなしにして、そのボルトが水流で外れてあつちこつち一次冷却水の中を走り回つた。これは先ほど言つた、この

ぐらいしても大丈夫だろうという感覚の一つのあらわれのよ
うな気がするのです。一つの例として言うならば。

森 そういうことはもちろん好ましいことではないので
す。しかしスリーマイルの場合は放射能が出た量は少ないけ
れども、そういう事故との結びつきはまた別の問題です。

榎田 そうでしょうか。要するに、人間と機械との関係に
おいては、同じ事象ではないですか。

森 それは、さつきから私が言っているように、一般化す
ればね。

榎田 一般化というのではなくて……。

森 では、いかげんにしていいのか、制御棒を抜いてい
いのか、安全装置を切っていないのかと。安全装置を全部切っ
ていいなんてことは、「不注意」といったこと以前のことと
全く違いますよ。日本の原子力発電所で安全装置を切ろうと
思ったら、運転室のパネルの裏側へ回って鍵を借りてきてあ
けて、マツチ棒が何かはさまなければ切れませんよ。そんな
こと考えられんでしよう。あたかも今のようなことまでやる
のだというように、話を拡大されては困るということを私は
言っている。私自身も、最近小さなことにしろ、少し故障や
事故が多過ぎる、電力会社もしっかりしてくれと言っている
のです。しかしそういうことと日本の原子力発電所がどうだ
とか、原子力はやめるべきか続けるべきかという議論を短絡
してもらっては困るということを言っているのです。

榎田 いや、それは、そういうふうには原子力の方はおっし
やるけれども、必ずしもそうではなくて、石油の値段という
ものはそんなものと違うでしょう。

森 どういうものですか。

榎田 もう少し経済的な問題でしょう。

森 需要が減れば下がるのではないですか。

榎田 需要が減れば下がる、ごく単純に言えばそうだけ
ども、そういう種類のことでなくて、もっと原子力以外の
要因もあるわけだから……。

森 もちろん、それだけではない。

榎田 だけでも、そういうふうには説明をされるわけ
です。

森 それでは、ついでに申し上げますと、今、世界の原子
力発電は大体三億キロワットです。それは反対しな
いでしょ。本当だから。

榎田 まあいいですよ。発電設備のことですか。

森 そうです。三億キロワット。それで、できている容量
が世界の電力の一六%。それを石油の量に換算しますと、も
し石油で発電したとしますと、大体四億トン以上です。これ
だけの量なのです。一方、今の石油の貿易量とい
いますか、国の中で売り買っている。要するに国際取引の量が十二億
トンです。だから三割。つまり、原子力がなければ石油の貿
易量は十六億トンぐらいいまで売れているはず
です。それは恐らくサウジアラビア全体の生産量より二倍ぐらいいでしょう。

榎田 そうでしょうか。例えば、この前の浜岡原発の再
循環ポンプが二つともとまった事故にしても……。

森 事故は、もちろんいいことではありませんよ。

榎田 いいことではありませんよ……。

森 あの再循環ポンプがとまったからどうな
ったかという、要するに、自然循環状態になっただけのこと
です。決していいとか、そんなことは大したことは
ないと言っているのではないですよ。そこは誤解しな
いでください。

やっぱり機械がとまるということはいけ
ない。しかし、自然循環状況になって設計通り五〇%出力
になっているわけ
です。

エネルギー源とコスト

榎田 次へ行きましょう。「エネルギー源としての必要性
とコスト」について。最近、原子炉のコストが上がって
きています。それは石油のコストが上がってきたのだとい
う話で説明されるけれども、いずれにしろその辺のところ
はずいぶん難しくなってきたというわけですよ。

森 厳しくなってきたというけれども、原子力が出た
ために石油の値段が下がったのです。

榎田 本当でしょうか。

森 そうですよ。

今、十二億トンという需要が一億トンも上がれば、恐らくO
PECの関係から言うところ、すぐ値段が暴騰するでしょう。

そういう状況ですから、原子力発電所は——石炭もありま
すけれども、石油の値段が上がったために経済成長が減速、
エネルギーの需要も減速して、そのために電気も減るとい
うように、いろいろなことが重なっていますけれども、そのた
めに相対的にかなり原子力が石油発電、石炭に追いついたと
いうことは事実ですね。

榎田 原子力から電力が出ていることは否定するわけでは
ないのです。しかし、電力が出ていることを言われて、その
出ている電力が石油を節約しているのではないかと
言われるの
だけども……。

森 なぜいけないのですか。

榎田 しかし、それは電力を生産することばかり言
っているわけ
で、原子力を作る時に石油、石炭を消費しているこ
とを言っていないわけ
です。

森 少なくとも火力発電よりは原子力のほうがはつきりい
っていいでしょう。

榎田 原子力を使うことが、石油の使用量を減らしたこ
とになるのかどうかは、今のところ、まだちゃんと計算でき
ていないのですよ。一九七六年にアメリカのエネルギー開
発庁が計算して以来ないでしょう。
森 ないことはない。

榎田 ないですよ。みんな中途半端な計算しかしてない。エネルギー開発庁の計算結果では、石油や石炭を燃やして電力が一出る場合、原子力を通してやれば四出る。四倍だというので、よかった、よかったという議論にしているのですが、四倍程度では安心できない。いろいろ計算上の積み残しがあって、私が計算しなおしたところでは、トントンです。日本でも計算しなければならぬという議論までありながら、日本での計算結果は出てこない。

森 別に石油でなくたって、ウランでもいいんですよ。ウランで発電して、それで鉄をつくったっていいわけですから。鉄会社だって電気を使っていますね。その電気が原子力であつてもいいわけですよ。石油の電気でなければいけないということはないから。あなたのおっしゃったことは……。

榎田 そういう種類のことをちゃんとできてもないくせに……。

森 くせに、と言うけれども……。

榎田 原子力発電でこれだけ節約していますみたいな言い方するのはおかしいのではないですか。

森 石油発電所をつくるよりは、少なくとも節約になっていきます。

榎田 そうでしょうかね。

森 そんなことは明々白々でしょう。

榎田 そうでしょうか。

榎田 原子力発電でこれだけ節約していますみたいな言い方をするのはおかしいのではないですか。そこを間違わないでくださいよ。エネルギーの消費というのは、あなたの得意なアントロピーのことから言っても、必ず環境を劣化させる。エネルギーはなるべく節約したほうがいい。もちろん、原子力については、特に日本の場合、原爆の体験もあるし、要するに、今までと違って安全性とか、廃棄物処理とか、とことん徹底的にやろうという姿勢でやっていることは事実ですよ。それはそうしなければいけないと思っています。ほかがいいかげんにやってきたから、こつちも垂れ流しというわけにはいきません。それはいいけれども、原子力だけが廃棄物があつて、ほかのものはきれいだということをおっしゃっているわけではないでしょう。

榎田 そんなことを言っているわけではないのです。ただし放射能の問題というのは、ほかに比べて直接的な大きな問題を持つているわけですよ。

森 どういう。

榎田 おっしゃったではないですか。放射能の被爆の問題も含めてね。もちろん、化学毒物の汚染の問題を私は軽視しているわけではないのです。しかし、放射能という問題はほかの問題と多少違うところがある。

森 それはもちろんです。

榎田 それで、話は科学技術の話です。科学技術にすべてを任せて科学技術がそのうちに解決すると言いながら結局で

森 だって、石油発電所は石油そのものを燃やすのだから。榎田 エネルギー収支計算は複雑なのですが、何だか原子力発電で石油が節約されていいかのごとき言い方をするのはおかしいのではないだろうか、私は思うのです。

森 「総エネルギー収支の点から、原子力のメリットは大評価し過ぎではないか」とおっしゃりたいのでしょうか。なるほどあなたが、エネルギー収支で独特の議論をするのは御自由ですがそれを、原子力をつくるのがムダ使いであるかどうか、石油のムダ使いであるとか、これは困りますね。

榎田 それはですね、原子力が石油のかわりだと主張するからです。ほかの企業は何かのかわりだなんて主張しないから、したがって、何とかのかわりと言わないから、それとの比較計算などする必要はないのです。ところが、原子力は石油のかわりだと言う以上、ちゃんと石油のかわりだということについて証明しなければおかしいですよ。

原子力は放射能をつくる

榎田 次に放射能の問題に移りたいと思います。原子力というのは、放射能をつくり出す。これはやっぱりあんまりいいことではないこととお認めになるわけですね。

森 原子力は放射能をつくり出す。火力は大量のSO_xやNO_xや炭酸ガスをつくり出す。ただ原子力だけが悪いもの

きなかつた。そもそも、原子力を始めた時、科学技術が、放射能問題を解決するに違いないと信じて開発されたのです。

森 何のことですか。

榎田 放射能の後始末が問題です。

森 高レベルですか。

榎田 高レベルも低レベルもです。

森 解決とはどういうことを指しておられるのでしょうか。

榎田 そもそもその毒物の後始末とは、毒物の毒性は消す。または低毒化して廃棄するものです。それができないものは、使うことを禁止します。例えば、PCBにしても、PCBなんていうのは消せないことはいけません。燃やせばいいのだから。しかし、燃やせばいいといっても大変困難です。そういう意味で、あれを使うことは禁止するわけです。

それと同じように、放射能の問題について、消すことも低毒化することも科学技術は失敗したのだから、したがって、やっぱりそういうものは禁止するというのが正しいのです。

森 低減するための技術的な可能性はありますが、要するに、ウランというものが天然にもあるわけですね。分量は少ない。それを燃やした結果、高レベル廃棄物になりますね。問題は高レベル廃棄物のことをおっしゃっているのでしょうか。

榎田 まずその点に限りましょうか。

森 そのほかにももちろんありますけれども、難しさを考えればね。千年になるか二千年になるかわかりませんが、もちろん、減衰によって大体、天然ウラン並みの放射能に下がりますね。いけませんか。

榎田 ヨウ素の129を除いてね。そのほかのテクネチウムなんかも除いてね。

森 そういふものを入れても、千年か二千年たてば、トータル放射能としては、その程度のものになりますね。

榎田 まあ千年で、そういうことでしょうね。少なくともありませんね。

森 天然ウラン並みになりますね。まあ天然鉱石にしましうか。少し品位のいい天然鉱石位の放射能になりますね。いいですか。

榎田 そのほかにまた……。まあ、いいです。話としては、それで一遍閉じておかないと。

放射能の処理方法をどうする

森 何か後で急に言われても困るから(笑)。千年、こういうものをきちんと管理しておくということが一千年たてば、もちろん天然ウランなりウラン鉱石並みの扱いはしなければいけません。それはもちろん、町じゅうにほうり出していいということはありませぬけれども、千年たてばもちろん

天然ウラン並みの管理はしなければいけない。あるいは極端にウラン鉱石を掘ったところへ返すとか、それはもちろん、管理が全く要らないとは言いません。少なくとも天然に戻すということも不可能ではない。

ただ、千年とか二千年の間、人間の技術によって、あるいは安定した地層によって管理することが、どうしてできないというふうにおっしゃるのですか。最近も藤ノ木古墳の例で、あの当時の人間の知恵で今日まで保存できているのです。

榎田 毒物でないから、ああいう古墳は管理できますよ。相手は毒物なのでしょ。

森 管理という意味は、人が近づかないようにということですよ。人が近づかなければいいわけでしょう。

榎田 人が近づかなくても、向こうが勝手に出てくる問題もあるわけです。にじみ出して。

森 にじみ出さないで……。

榎田 例えば、内乱がない、戦争がないという、そんなことの保障ができますか、その千年の間に。

高レベルの後始末については、ほとんど撤退しているでしょう。最初は岩塩層の中にしまおうと言っていました、撤退してしまふ。それから、花崗岩の話だつてアメリカはなかったことにする。

森 アメリカでは、堆積岩(凝灰岩)が水の関連でいいということ、堆積岩のほうに決まったのであって……。

がいつばいあるところでやろうとする。

森 そんなことはありません。

榎田 少ないほうがいいと言いながら、日本で水の少ないところなんか探せない。

森 ありますよ。幾ら掘っても地下水が出てこないから、どんな産業も来てくれないということもありますし。要するに、水というのは非常に難しい問題で……。

水が少ないところがいいということなら、日本で言えばどんなところがいいのですか。

榎田 だから、しようがないですよ。地上の建物で保管する以外にないのです。

森 地上の建物で保管するのですか。

榎田 はい。放射能をつくったところで。動燃が再処理して高レベルをつくったのなら、動燃の敷地の中にちゃんと保管庫をこしらえて、ちゃんと管理すべきですよ。それを幌延まで持って行って捨てようとするから問題が起きる。

森 ちよつと待ってください。幌延にだれが捨てようとするのですか。

榎田 幌延にまず貯蔵する、つて書いてある。工学的貯蔵所に。

森 それは、あなたが言っているような今の地上貯蔵所の話でしょう。

榎田 いや地上ではありませんよ。地下つて書いてあります



日本のお茶もチェルノブイリ原発事故で汚染されているという(4・24集会から長倉徳生氏撮影)

すよ。

森 計画では地下では地下水の流れなどを研究する計画になっていきます。また貯蔵するにしても一〇メートル位下げた方が地震を考えると安全であることは事実だから。

榎田 計画では地下貯蔵所ですよ。そんなのムチャクチャです。地震だったら地上のほうが安全です。だって、地下で崩れてどうしようもなくなったら、もう回収など不可能です。

森 震度は地上と地下とは、下のほうが少ない。

榎田 まあ震度は少ないけれども、そのかわりグシヤグシヤになったときに、それを解決するのは、地上でなかったらできませんよ。

「公開」の原則の是非

森 幌延の問題を言いますと、別にあそこへ投棄するといっているわけではないのですよ。あそこに試験所を誘致したいといわれ、適地かどうかを調べさせてほしいと言っている。それだけのことなのです。

榎田 調査されたにもかかわらず、調査資料を公開されないわけですか。

森 それは、関係者には説明しているはずですよ。

榎田 しかも調査委員の氏名の発表もなさらないわけですか。

森 幌延の問題に反して、私が「秘密を守るから見せてください」ということを言うのでは、おかしいのではないですか。

榎田 そうではなくて、悪用しないということですよ。

榎田 原子力の推進側から見れば、推進を妨害する者はすべて悪用でしょうから。しかし、推進の気持ちを持っている者と、反対の気持ちを持っている者が、同じ日本に住んでいる人間として、政治を動かして、政治で決めているわけじゃない。

森 成果が出たら、もちろん公開しなければなりません。

榎田 ところが、動燃の場合は成果のほうですよ。

森 それは一時的な成果ですよ。

榎田 いずれにしても成果です。

森 まだ掘りたいところも掘れてないしね。私有地だけしかつかめない。

榎田 政治というのは、大騒ぎして決めるのですよ。それでいいのです。それを、大騒ぎになるから、嫌だから出さなというものは、成果の公開という原子力基本法の基本的精神にも違っていないませんか。だから、出せば大騒ぎになる、嫌だということはおかしい。

森 公開の原則は、私自身が三原則をつくるときには主張して走り回ったほうの人間で、私はなるべく公開させるようにしたいと思っている。

榎田 賛成です。

森 私が物理学会でやったからご存じでしょうけれども、

やはりそういうことというのは、信頼関係というか、そういうことをやっている人は、そんなことを秘密にするほどのことでもないわけですね。科学的にきちんと議論されるのなら、出すと思うのです。ところが、今のような情勢の中で出すと、恐らくあなたがそれを現地へ持って行って、それ見ろ、こんなに水があるところは危ないぞとやるから、そうやられては困ると思って隠しているのではないのでしょうか。率直に言うて気持ちはわかる。

榎田 しかし、公開という意味は、みんな議論するための公開ですよ。だから、皆さんで議論するためのことを禁止されたら、公開ではないですよ。

森 出かけて行って、こんなところは危ないですよ。溶ける。こんなところは絶対不適地であるなんていうようなことを、あなたが行ってしゃべることが議論ですか。それは科学的な議論ではないですよ。

榎田 原子力基本法で決めた公開というのは、科学の問題ではありません。法律で決めている成果の公開というのは、政治の問題です。科学の問題ではなくて、成果の公開というのは、原子力というものをみんなで決めましょうという意味の成果の公開です。そうでしょう。

森 それはいいですよ。

榎田 したがって、そのことが、みんな決めましょうと

原子力行政の今後

最後に「原子力行政の現状と今後」という問題について議論してもらいたいと思います。いま国民の側で、危険ではないかという意識を持つたり、現実には、汚染食品が入ってきて、原発というものを身近に感ずるようになってきているわけですね。今までに見られないような原発の動きが非常に強くなってきています。それから、単なる原発とかかという人ではなくて、主婦とか、お子さんを持った人たちが危険性を勉強しているとかということが起こっているわけですよ。

それに対する推進側、原子力行政をつかさどる人たちのやり方が、自分たちが勉強してチェルノブイリの危険性なり、いろいろな食品の汚染なりというものを身近に感じている人、に、どれだけ説得力があるかといったら、あまりない。逆に、伊方をはじめ、あちこちでしょっちゅう事故のニュースが聞かれる……。

森 まあ、ちょっとした故障ですけども。

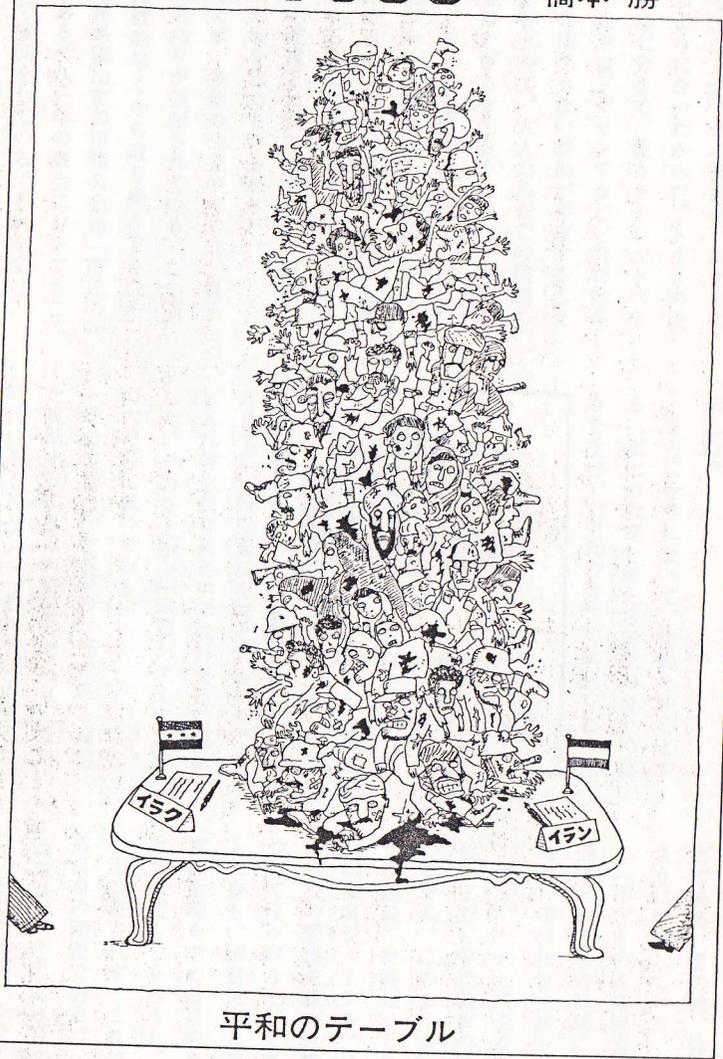
榎田 そのようなことが積み重なると……。

森 こういうときに限って起こすのはほんとうに困ったことですよ(笑)。

榎田 そのこと自体が、むしろ逆に言うと、つまり危険な

笑ってサバイバル

橋本 勝



平和のテーブル

やっぱり、世界全般に対して日本が責任を持つという事はできない相談だから、一歩引き下がつて、日本から原子力をとめる。

森 開発途上国だって安全に努力していません。たしかに原子力は放射能を伴うことは事実ですから、それをちゃんと管理するということ、世界に冠たると言ったら、

んだという意識になるわけですね。それをどうするかということを含めて今後の原子力行政をどう進めていくかということについて伺いたいと思います。

森 私もエネルギーというものは無制限に使ってもいいということについては修正したほうがいいと思うし、どんなエネルギーも安易に使うと大きな害がある。しかし、エネルギーはゼロというわけにはいきません。資源の有限——これまた議論になりますけれども、いろいろなことを考えて、せっかく原子力の技術的なエネルギーを利用する道を手に入れたわけですからね。

榎田 私が最後に一言言うのであれば、原子力推進の人たちは、原子力を自分たちの手で扱えるものだ、扱えるようにしてみせるという気持ちでなさっているのは、理解できるのです。しかし、科学技術にも不可能なことがあることを認めるべきです。そして技術というものは、だめな場合に、見切りをつける時期の判断が大事なことです。原子力についてだめだということがわかっていても、いつまでも見切りをつけないで、何とかしてみせると言い張るか、そうでないかの時期に、今、来ているような気がするのは……。

森 それはチェルノブイリの……。

榎田 チェルノブイリの問題以降ですね。もう少し前に、そういうことが気をつけばよかったのですけれども、それは一部の人のみだけの問題で、今、ここで原子力に関係のない

大衆まで巻き込んで、その問題が大きくなったこの時期に、私は原子力の方々にお願ひしたいのは、「今だ、見切りをつける時期は」と、これを判断してほしい。こう思います。

森 何ですか。チェルノブイリ以降でなくなつたって、原子炉の中にある放射能を全部ぶちまけたらどうなるというの、既に三十三年前に計算で出ている。

榎田 話をそういうふうに茶化さないでください。

森 だって、チェルノブイリが起きたということが、なぜ今後安全にやらないといけないということに直結するのですか。

榎田 そうではなくて、結局は人間は政治的動物ですから、政治の流れでこういうふうに変わってきたわけです。そのときに、何だ、そんなことは昔からわかっていることなのだよと言うけれども、今まで科学技術が、何とかすると言いつつ続けたわけですね。しかし、もはや原子力は科学技術では何ともならないものとして、謙虚に受けとめていただきたい。

もう一つは、日本の原発は安全だ、安全だとおっしゃるのだけれども……。

安全性確保を至上命題に

森 いや、安全に努力しており、それに成功してきたといっているのです。

榎田 安全に努力しているとおっしゃる。しかし、日本だ

わけです。そのときに、日本は安全に努力していると言われる、ほかのところについて、安全でないから、やめると言えるわけではない。ということになると……。

ちよつと言葉がキザっぽいですけども、安全性を保ちながら、現在まで全く害なしに運転してきたわけです。今後もこういう努力をちゃんと積み重ねていけば、十分安全は保てるし、それによって日本ひいては世界のエネルギーの安定ということに寄与して、地球全体として見て、私はやっぱり原子力は石油の貿易量の何割か減らしているぐらいの大きな量になつていくわけですから、ちゃんと努力をしていけば、十分にやれると思います。

確かにチェルノブイリは原子力発電所の運転としてはメチャクチャというか、爆弾を仕掛けて爆発させても、あんなことにはならないのではないかと思うぐらい、大きな事故になつた。日本人は既に原発というか、原子力の怖さを知っていましたけれども、世界にとって大きなショックだったことは事実です。

長期的に見れば、これまた反対があるでしょうけれども、化石燃料は三十年でなくても百年か二百年か知りませんけれども、それぐらいの間でなくなるのですから、人類はあと何百万年生きていく中で、千年とか何千年かの単位の燃料を考えていかなければならない。あるいは高速炉がうまくいけば、一万年ぐらいの間、原子力は使えるわけで、全く異質的なものを、せっかく人間の知性で手に入れたのですから、人間の知性、理性で何とか使いこなしていく努力をすること自体に大変意義があるし、それによって、また人間の資質が向上も

校則

「校則」をめぐる論議が、ようやく盛んになってきた。その弊害が、あまりに目立つようになったからだ。トイレの使用時間は七分まで、使うトイレトベーパーの長さは三十センチなど、教育効果とは何の関係もない校則が存在することが浮かび上つて、大人たちもこの問題に関心を持たざるをえなくなった。あるいはまた、管理の先行が非行防止にだけ役だつたかを、疑問視する専門家も多い。校則や生徒心得が、児童・生徒の人権を拘束する結果になるとすれば、これまた教育的配慮とは別問題である。憲法は基本的人権を認めているからだ。

たとえば、各地の公立中学では、男子生徒の丸刈りが強制されている。この問題に比較的早くから取り組んできたのが、千葉県流山市の市議会会派「市民の会」である。八一年の議会においてもこの問題で質問をしている。それを受け、

します。電力会社だって、原子力発電でずいぶん立派になつた、そういうことを言っている人もいます。そういう難しいものにチャレンジするということは、安全運転を旨として努力をしなければいけないと思います。人類とは共存しないと何とかいうことは間違いだと思ひます。どんなエネルギーでも、それなりに大きな影響はあります。CO2の問題なんか、地球の気候を変えるといわれている。遺伝的な影響だつて、SOxやNOxだつてあるかどうかさえ、まだわからないわけですから。だから、原子力をいいかげんにやっていいとは思ひません。

いろいろ批判をされていますけれども、現在まで全く安全にやってきましたので、その線を中心をやつていかなければいけない。最近、非常に誤つた情報によって日本の原子力について、危険性が誤解をされている。その点については、どんなところへも行つて説明申し上げなければいけないと思ひます。

榎田 繰り返します。しかしながら、見切りをつけるべき時期かどうかということ、ちゃんと考えてください。

森 見切りをつけるどころか、まだまだ原子力というのは大切に育てなければならぬ。

榎田 そういうところを謙虚にお願いします。長時間にわたりまして、ありがとうございました。

教育長は今月の一月、校長会に対して頭髪規制のあり方について検討するよう指示した。

さらに今年になって、市民を中心とする「流山の教育を考える市民の会」の動きを受け、「市民の会」では遅くとも九

地域の目

住民図書館館長

丸山 尚

月までに、頭髪規制を廃止するよう、申し入れ書を教育長と中学校長会宛に提出した。その全文が、「東葛ジャーナル」の六月号に載っている。

その要旨は、「身体の一部である頭髪を規制することは人権侵害であり、また時代にそぐわない」「それを廃止するこ

とによって、児童・生徒がのびのびとした学校生活ができるようにすること」などである。その他、体罰についても次のように要望している。

「子どもの人権侵害の典型である『体罰』という名の教師による暴力・傷害行為は、学校教育法第十一条で禁止されています。しかし残念ながらこの『体罰』はいまだに学校教育の場からなくなっていない。このような行為の根絶の施策を積極的に推進して下さい」

「東葛ジャーナル」はこれまで、市内の学校の管理主義的教育と体罰の実態について度々取り上げてきた。今回の申し入れ書も、頭髪規制の背後にある管理教育の撤廃を求める目的を持っている。たとえ子どもであろうと、人権を侵害することは許されず、これは大人である私たち自身の問題である。

〔東葛ジャーナル〕発行 千葉県流山市長崎二一五五―二六、くさかべ方、東葛通信社、四〇四七―一四三―二五八三